読書のみちしるべ

MICEビジネスにワクワクした日

観光委員長
コングレ社長
武内（たけうち） 紀子（のりこ）

「一番印象深かった本は？」「座右の銘は？」などと聞かれると、どうも絶句してしまう。その時々であれこれ思うことはあったのに、何かと言われると詰まってしまうのだ。

そんな私ながら、今回浮かんだのがこの本、日経産業新聞編の『コンベンションビジネス――イベント一切 承ります』だ。コングレという会社ができて２０２５年で35周年。若かりし日を思い出しながら、何十年も前に読んだこの本について書くことにした。

実は本になる前、最初に読んだのは新聞の特集記事だった。昔から新聞を読むのが大好きで、大学の進路で迷った時も新聞の記事に助けられたし、人に教えてもらう以外は、営業情報や何かを考える時のヒントを新聞から得ていた。

まだ社会人の駆け出しの頃、朝は数種類の新聞をコピー機の上に広げ、立ったまま読むのが日課であり、これが結構、楽しみな時間だった。そこで出会ったのが『コンベンションビジネス欧米事情』という特集の連載である。

当時は日本経済が拡大する中、国際会議場、展示場、ホテルを3点セットで揃えた「コンベンションコンプレックス」が神戸に誕生し、都市の発展策としてＭＩＣＥビジネスが「発見」された時期だった。その基となったのが欧米の施策で、この特集では事例がいくつも紹介されている。

例えば、ドイツでは、戦後復興策としてメッセ（産業見本市）を戦略的に振興し、ホテルが足りない時は市民が民宿で協力してきた。欧州の地の利も活かし、メッセ大国から経済大国へと成長を遂げたのだ。米国では、治安の悪い地域やウオーターフロントの再開発策としてコンベンションセンターを中心とした開発に取り組むことで巨額の経済波及効果を生み、雇用拡大にもつなげている。

この記事で自分の業界の仕事が世界をダイナミックに動かしている様子を知ることは、当時の私にとってワクワク以外の何ものでもなく、仕事の大きなモチベーションとなっていた。

今、時代に合わせて形を変えながら、ＭＩＣＥへの期待が広がっている。時を経て、まちづくりや都市のブランディングを担うＭＩＣＥとその施設運営に携われていることをうれしく思う。そして産業や学術、様々な交流がゼロから立ち上がっていく場面に、その一員として共創していく経験は、何物にも代え難く楽しい。

若い頃に私がこの本で感じたような仕事に関するワクワクを、次代の人たちが新たな形で経験し、ぜひ自分自身の活躍の「場」をつくってほしいと願っている。

『コンベンションビジネス
イベント一切 承ります』
日経産業新聞 編
日経新聞社 刊